

生態系ネットワークの復活



◆ フェアウッド調達

- › 木材調達ガイドラインとは
- › 木材調達ガイドラインの運用と改定
- › 環境NGOとの協働
- › 国産材の活用
- › 木材の循環利用

◆ 「5本の樹」計画

- › 「5本の樹」計画とは
- › 生物多様性活動に関する民間団体への参画
- › 緑豊かな賃貸住宅「シャーマゾンガーデンズ」
- › 分譲マンションにおける緑化の推進
- › 「5本の樹」いきもの調査
- › 「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」
- › 「新・里山」

フェアウッド調達

木材調達ガイドラインとは

フェアウッド調達（持続可能性、生物多様性に配慮した原材料調達）

私たちの暮らしや企業活動は、生物多様性の恵みに基づく資源や生態系のもたらすサービスに支えられて成り立っています。特に、大量の木質建材を利用する住宅メーカーとして、貴重な生物由来原料である木材については、持続可能性に配慮して計画伐採され、かつ、社会的にも公正な木材を原料として選択することが重要です。



一棟の住宅で使用される建材
住宅一棟で使用される部材は5～6万点にも及びます。

木材調達ガイドラインとは

森林に関しては、海外において違法伐採や過剰伐採が根絶されない一方、国内では木材自給率が上昇に転じたものの、まだ3割以下に過ぎず、伐採されずに放置されて山が荒廃するなどの問題があります。

当社は大量の木材を利用する住宅メーカーとして、これらの問題に取り組むため、合法性や生物多様性を軸に、伐採地住民の暮らしまでを視野に入れた「木材調達ガイドライン」を2007年4月に策定。これに基づき、「フェアウッド」※ 調達を推進し、調達レベルの向上を図っています。

「木材調達ガイドライン」は10の調達指針で構成され、違法伐採の可能性や樹木の絶滅危惧リスク、伐採地からの距離、木廃材の循環利用、伐採地の先住民にとっての伝統的・文化的アイデンティティ、伐採地の木材に関する紛争など、多面的な視点で調達木材を評価できるようになっています。当社のこのガイドラインは、単に生物多様性への配慮だけでなく、ISO26000の要請する各国の社会的課題への配慮の視点も含む内容として構成したものです。

※ フェアウッド：伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材、木材製品のこと。財団法人地球・人間環境フォーラムと国際環境NGO FoE Japanが提唱

積水ハウス独自の「木材調達ガイドライン」の内容

■ 「木材調達ガイドライン」の10の指針（2012年度改訂版）

以下の木材を積極的に調達していきます。

1. 違法伐採の可能性が低い地域から産出された木材
2. 貴重な生態系が形成されている地域以外から産出された木材

3. 地域の生態系を大きく破壊する、天然林の大伐採が行われている地域以外から産出された木材
4. 絶滅が危惧されている樹種以外の木材
5. ★ 生産・加工・輸送工程におけるCO₂排出削減に配慮した木材
6. ★ 森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材
7. 森林の回復速度を超えない計画的な伐採が行われている地域から産出された木材
8. ★ 計画的な森林経営に取り組み生態系保全に寄与する国産木材
9. 自然生態系の保全や創出につながるような方法により植林された木材
10. ★ 資源循環に貢献する木質建材

★:2012年度に改訂した項目



■ 調達レベルの評価 ～ 指針の合計点で調達ランクを決定

合計点(最大43点)	調達ランク
34点以上	S
26点以上、34点未満	A
17点以上、26点未満	B
17点未満	C

各調達指針の合計点で評価対象の木材調達レベルを高いものから順にS、A、B、Cの四つに分類。
10の指針の中で特に重視している1、4に関しては、ボーダーラインを設定。

フェアウッド調達

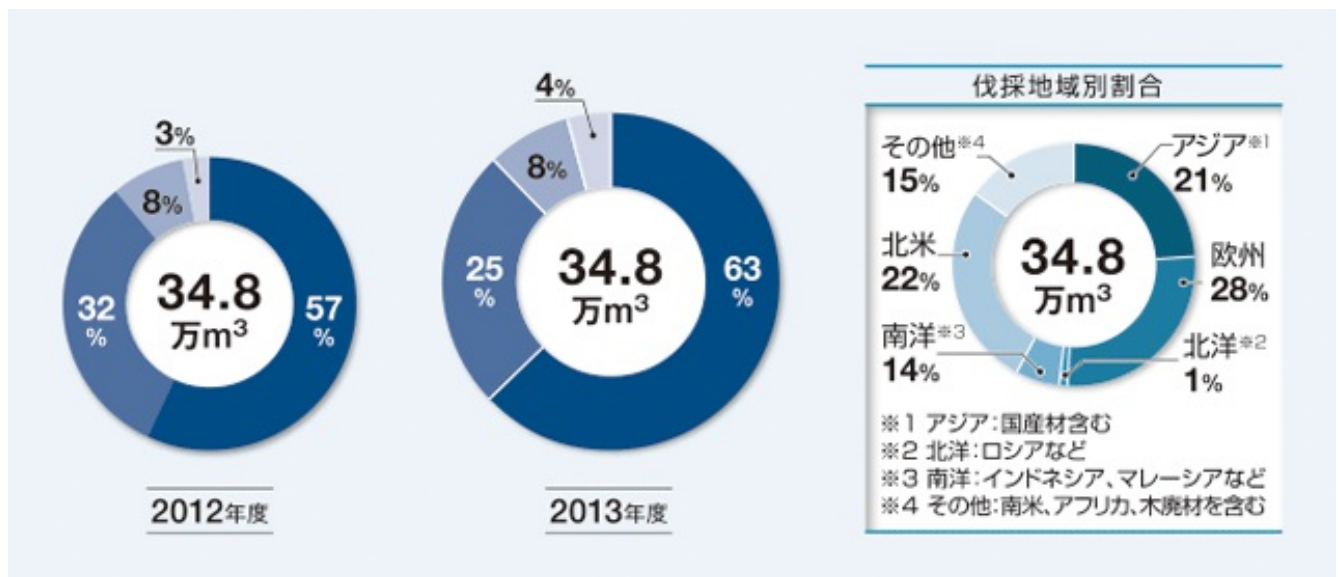
木材調達ガイドラインの運用と改定

2013年度の実績

2006年度に策定し2007年度から運用を開始した「木材調達ガイドライン」も6年目となり、多くのサプライヤーがこれを参考に、自社の調達状況の改善を図りはじめています。

2013年度は、目標としたS・Aレベルの木材全体では前年から1ポイントダウンしましたが、最も持続可能なSランク木材の比率は前年度を6%上回る63%に至り、高いレベルで木材の調達レベルの向上が見られました。今後もサプライヤー各社に対してよりキメの細かい改善提案を進めることで質の向上を図っていく予定です。

■ 取り組みの推移



ガイドラインの改訂

ここ数年で、「Sランク木材の増加、Cランク木材の減少」という当初設定した目標が概ね達成しつつあることもあり、2011年度はより高い目標に向けてガイドラインの改訂に着手し、2013年度もこれに基づく運用を推進しました。改訂に際しては、従来よりガイドラインの運営に協力をいただいている環境NGO FoE Japanと森林を巡る世界情勢などを踏まえた検討やサプライヤー各社へのヒアリングを重ねました。

改訂の主眼は、第一に、事業活動における社会性への配慮を要請するISO26000発行を受け「社会性への配慮」の内容をより詳細に再検討したこと。第二に、木材の乾燥工程におけるバイオマスの利用などを積極的に評価し木材のCO₂削減を評価したこと。第三に、再生材や認証材の一律的な評価について、ケースによっては具体的検証を加味するように見直しを行った点です。

2012年は、こうして策定した新しいガイドラインに沿って実態調査を進めました。ただ、2007年以降これまで運用を続けてきたガイドラインの配点を変更してしまうと、各社の進捗管理に連続性が維持できないとの声も容れて、新たな要素は加算要素として別枠で運用改善に活かすことになりました。

■ 調達指針⑤ ... 「生産・加工・輸送工程におけるCO₂排出削減に配慮した木材」を調達します

乾燥工程の使用エネルギー

【趣旨】木材のライフサイクルCO₂の中で、乾燥工程が占める割合は非常に大きいため、(調達指針⑤の)評価項目とします。

加点	乾燥時のバイオマス利用状況
2点	通常バイオマスの実を利用しているが、時期によっては補助的に重油を使用することもあるなど、乾燥熱源の過半数以上でバイオマスなど非化石燃料を使っている。
1点	乾燥熱源の過半数以上は化石燃料だが、過半数に届かないまでも、一定量のバイオマスを使用している。もしくは、バイオマスを活用する時期がある。
-1点	バイオマスを使うこともあるが、ごくわずかで、ほとんど使っていない。もしくは、バイオマスを使っていない。 ／乾燥時に使っている熱源が不明

■ 調達指針⑥ ... 「森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材」を調達します

木材調達における人権擁護や不当な労働慣行の廃止、伐採地の地域社会の安定などに関する取組み

【趣旨】木材調達のさまざまな段階で(調達指針⑥のような)社会秩序を乱すマイナス面が大きな課題としてありますが、一方で、労働者の人権擁護や不当な労働慣行を見直す動きも始まっています。また、代々受け継がれてきた森林と共生する林業や、小規模農業と組み合わせることで木が育つまでの収入を確保するアグロフォレストリー(混農林業)など、地域社会の安定を維持する取組みも広がってきています。

加点	
1点	人権や労働慣行に関する企業方針や調達指針等、明文化された文書があり、取引先含め、共有されている。
1点	人権や労働慣行に関する訴訟や通報に対応できる仕組み(組織、システムなど)を構築しており、過去10年間に重大な訴訟や通報が無いことを確認できている。
1点	コミュニティ林業やアグロフォレストリーなど、伐採地住民の主体的な森林経営に貢献する木材調達を行っている。

フェアウッド調達

環境NGOとの協働

当社がこの「木材調達ガイドライン」を策定するにあたって注意したのは、自社の独善的なガイドラインに流れないように客観性を確保しつつ、作成過程の透明性を担保することです。そのために、世界の木材の生産にかかわる最新の状況を把握しつつ、各サプライヤーの抱える現実的な課題を踏まえて、国際環境NGO FoE Japanとの検討を重ねてきました。

NGOとの協働は制定だけに留まらず、実際の運用段階における検証依頼や相談、そして本年度の改訂作業につながっています。例えば、2011年度においても、2010年11月1日にISO(国際標準化機構)による国際規格であるISO26000の発行を受けて、木材生産地における住民の生活安定など社会性への配慮についてNGOから最新の状況説明を受け、これに基づき何回もの協議を経てガイドラインへの現実的な反映の検討を重ねました。

また、当社からも、温暖化防止のために木材の乾燥工程における重油の利用等についてのサプライヤーの現状を説明し、バイオ利用の加点評価の可能性について世界の先進事例についての報告を受けて議論を行う等、極めて高い運用レベルへの反映にまで踏み込んで意見交換を行っています。

こうした流れを受けて、2012年度も、前年度に続き「木材調達ガイドライン」の改訂について意見交換を重ね、ガイドラインの内容を確定しました。さらに、改訂したガイドラインに基づいて木質建材のサプライヤーへの実態調査を行った際の回答内容に関しても、新しい伐採地や樹種についての評価依頼などをはじめとする様々なアドバイスをいただきました。

「資材調達」という経営の根本に関わる部分についても、こうした本音の意見交換ができるようになってきていることは、企業にとっても世界標準の異なる価値観を認識して事業への反映可能性を検討する貴重な機会となっています。

また、近年は個々のサプライヤーから、自社においても木材調達のあり方についての改善を進めるに際しNGOを紹介してほしいという要請もあり、当社が築いたNGOとの信頼関係はサプライヤーにも波及し始めています。

また、2013年は、当社の直接のサプライヤーのみならず、異業種メーカーから木材調達の進め方についてアドバイスを求められるケースも増え、環境NGOとの付き合い方についてアドバイスを言ったり、直接NGOを御紹介したりといったケースもありました。

さらなるサプライチェーンの強化を

「継続は力なり」。2007年から継続した「木材調達ガイドライン」の真摯な運用は、いまや木材の長いサプライチェーンの上流にまで波及する大きな影響力を発揮するに至っています。2012年度からは、今後ビジネス界において重要なキーワードになるであろう「人権」や「天然資源等の生産地周辺の社会的な影響」などに配慮するエシカル調達にも着手し、その取り組みを深化させています。社会的側面への配慮には、サプライヤーのみならず、政府やNGOなど様々な方面からの情報入手が不可欠ですが、そうした取り組みが実現した背景には、環境配慮に対する確たる意思と、環境NGOなど外部の意見にも真摯に耳を傾けるオープンマインドが功を奏しているのだと思います。今後も流行に左右されない本業における真摯でぶれないガイドラインの運用に大きく期待しています。



国際環境NGO FoE Japan
事務局長
三柴 淳一 様

フェアウッド調達

国産材の活用

国内の森林経営の健全化や、木材輸送に起因するCO₂排出量の削減を考慮し、当社は国産材を活用した合板の積極的な導入をはじめ、国産広葉樹の内装部材に活用するなど、活用の幅を広げてきました。

2013年4月1日より開始された「木材利用ポイント制度※1」に対応するモデルとして、家の骨組みとなる柱・梁に厳選された国産材としたシャーウッド「純国産プレミアムモデル」を新設しました。柱については、単に国産材と言うだけでなく本物志向の銘木ブランド材を用い、また一般には採用の難しい梁についても国産2樹種から選択頂くことで、他ではできないプレミアムモデルを提案しています。



■ 純国産プレミアムモデルの仕様

部材	純国産プレミアムモデル(ポイント対応モデル)		
	スタンダード	アップグレード	ハイグレード
梁	カラマツ(新設)	カラマツ(新設)	ヒノキ
柱	スギ ・東日本(秋田スギ) ・西日本(吉野スギ)	ヒノキ (木曽、吉野、美作)	ヒノキ (木曽、吉野、美作)

日本の木の家に住まう。



本建築社「シャウッド」は、より良い住まいのために、水にこだわり、世界中の水を厳選しています。現在は、主に北欧の木を使用していますが、日本の自然素材にこだわりを寄せる方の思いにお応えするため、積極的に高品質な国産材を使用し、柱と梁の経過検査をよるごと国産化した「シャウッド純国産材プレミアムモデル」の提供をスタートしました。

柱には、品質で強度の強い国産材やカラマツを使用。とりわけ柱は、お住まいの地域に近い産地で育った地域ブランドと使用する木物とを、樹齢は水筒巻、なす野巻、長舟巻、秋田巻、なす野巻。地域に応じてお選び頂けます。地元の木で建てるシャウッド。愛着もひとしおです。

■主要構造部(柱・梁)に国産材を使用

国産材グレード	柱	梁
国産ハイグレード	ブランド巻	巻
国産ミッドグレード	ブランド巻	ナラマツ
国産スタンダード	ブランド巻	ナラマツ

シャウッド純国産材プレミアムモデル、誕生。



国産材でつくるシャウッドプレミアム構造材。シャウッドの国産材は、厳選した木を徹底して管理したコンシエージュで作り、品質を徹底管理し、丁寧に乾燥させています。品質は高く、コストも抑えています。

水にこだわり、一部一部が、品質で安心であるために、世界中の水を厳選しています。現在は、主に北欧の木を使用していますが、日本の自然素材にこだわりを寄せる方の思いにお応えするため、積極的に高品質な国産材を使用し、柱と梁の経過検査をよるごと国産化した「シャウッド純国産材プレミアムモデル」の提供をスタートしました。

水にこだわり、一部一部が、品質で安心であるために、世界中の水を厳選しています。現在は、主に北欧の木を使用していますが、日本の自然素材にこだわりを寄せる方の思いにお応えするため、積極的に高品質な国産材を使用し、柱と梁の経過検査をよるごと国産化した「シャウッド純国産材プレミアムモデル」の提供をスタートしました。

水にこだわり、一部一部が、品質で安心であるために、世界中の水を厳選しています。現在は、主に北欧の木を使用していますが、日本の自然素材にこだわりを寄せる方の思いにお応えするため、積極的に高品質な国産材を使用し、柱と梁の経過検査をよるごと国産化した「シャウッド純国産材プレミアムモデル」の提供をスタートしました。

水にこだわり、一部一部が、品質で安心であるために、世界中の水を厳選しています。現在は、主に北欧の木を使用していますが、日本の自然素材にこだわりを寄せる方の思いにお応えするため、積極的に高品質な国産材を使用し、柱と梁の経過検査をよるごと国産化した「シャウッド純国産材プレミアムモデル」の提供をスタートしました。

【純国産プレミアムモデル カタログ より】

※1 「木材利用ポイント制度」の目的、概要

木材利用ポイント制度は、地域材の適切な利用により、森林の適正な整備・保全、地球温暖化防止及び循環型社会の形成に貢献し、農山漁村地域の進行に資することを目的としています。地域材を活用した木造住宅の新築等、内装・外装の木質化工事、木材製品等の購入の際に、最大30万ポイント(1ポイント1円相当)の木材利用ポイントを付与し、各地の農林水産品等と交換できる制度です。

フェアウッド調達

木材の循環利用

木材の利用に関しては、バージンの木材を適切に評価し、植物の樹種や産地、生育速度に配慮しながら伐採することで持続可能な利用を行うアプローチに加え、世界的な木材資源のひっ迫を考慮すると、木廃材の有効活用にも取り組む必要があります。

近年の技術発達に伴い、建設廃材や製造工程で排出される木廃材などを再生木材として新たな木質製品を、用途に応じて効果的に活用することは、違法伐採木材などの調達の危険性を間接的に回避することにつながります。

ただ、こうした木材の需要の高まりに応じて、実際には再生木材の原料として利用される木材にも、一度ほかの用途に使用された木材や廃棄された木製品を原料とすることなく、バージン木材をチップとしたものが相当数存在することが明らかとなってきました。

そこで、2012年度に見直しを行った「木材調達ガイドライン」においても、再生木材のうち特に「パーティクルボード※」については、従来のように木廃材を原料とするというだけで最上位の「S」レベルと評価するのではなく、材料調達プロセス等まで検証し個別に評価するという方向に見直しました。

■ 見直した調達指針項目

調達ランク	解説
Sランク	よりレベルの高い資源循環に寄与するシステムや技術を開発し、主として廃棄処分された木製品や建設解体廃材など再資源化が困難な木廃材を活用した木質建材
Aランク	主に廃棄処分された木製品や建設解体廃材など再資源化が困難な木廃材を原料としている。一般的なパーティクルボード

※ パーティクルボードとは、木材その他の植物繊維質の小片(パーティクル)に合成樹脂接着剤を塗布し、一定の面積と厚さに熱圧成形してできた板状製品のこと。

【関連項目】

> [木材調達ガイドラインとは](#) (p.209)

「5本の樹」計画

「5本の樹」計画とは

「5本の樹」計画とは、当社独自の生態系に配慮した庭づくり・まちづくりの提案です。

日本の国土の約4割を占める「里山」は、絶滅危惧種を含めた多種多様な生き物をそこで養うばかりでなく、野生動物の移動のための回廊の役目を果たし、生態系ネットワークを形成することによって、生物多様性の保全に重要な役割を担ってきました。そこでは住まいも人の暮らしも、生態系の一員でした。しかし近年では、急速な都市開発、化石燃料に頼った住まいづくり・ライフスタイルの変化などにもとない、都市近郊での「里山」が激減し、人間から「里山」へのアクションが減った結果、本来「里山」の持っていた生物多様性が損なわれつつあります。

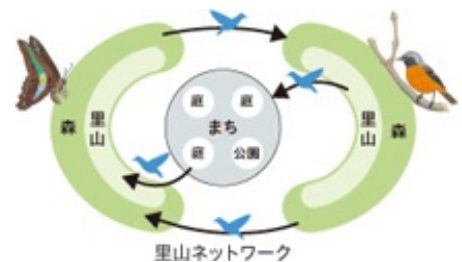
当社は、最多の住宅を供給するハウスメーカーの責任として、住宅を通じた自然環境の保全に向け、『里山本来の姿』を手本に2001年から生物多様性に配慮した造園緑化事業「5本の樹」計画を進めています。住まいの庭に小さな「里山」をつくることで、地域の自然とつなぎ、失われつつある生態系ネットワークを維持・復活させようというのが狙いの一つです。

「5本の樹」計画には「3本は鳥のために、2本は蝶のために、日本の在来樹種を」との思いが込められています。

日本各地の気候風土に合った在来種の樹木をこだわって植栽することで、生き物など身近な自然と共生し、時とともに愛着が深まっていく庭づくりを目指しています。

2013年度の樹木の植栽実績は106万本で、2001年の事業開始以降の植栽本数は2013年12月には累計1000万本を達成。2013年度末時点では1019万本となりました。

都市に、小規模でも庭や街路を設けると、野鳥や蝶などの生き物が訪れる場所になります。このような空間を少しでも多く設ければ、それらの生き物が移動する回廊となり、ネットワークを形成して生態系を保全し、生物多様性を豊かにします。こうした空間は、生き物にとって訪れやすい(利用しやすい)場所になるだけでなく、同時に住まい手も自然の豊かさを楽しむことができるようになります。



「5本の樹」による生態系ネットワーク

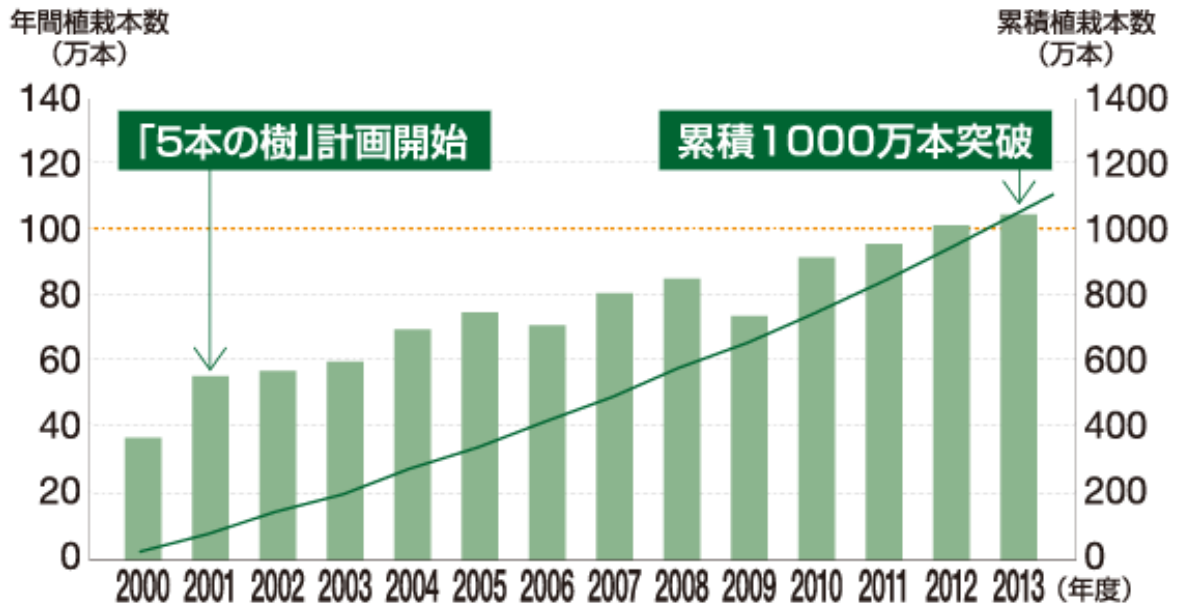
「5本の樹」計画の植栽例



「5本の樹」計画の成果

緑量のバランスを考慮した「5本の樹」計画の庭は、生き物が生息しやすい環境をつくるだけでなく、住まい手にも種々のメリットをもたらします。例えば、野鳥のえさ場となる実のなる落葉広葉樹は夏には緑陰によって強い陽射しを遮るだけでなく葉の蒸散作用で冷気を生み出し、冬は葉を落とした枝の間から暖かな日差しを住まいの中に取り入れて冷暖房エネルギーの削減に貢献してくれます。また、常緑樹は一年中緑の風景を保ち小さな野鳥たちが猛禽類などから身を隠す避難場所になりますが、そこに住まう人にとっては通りからの目隠しとなってくれます。また、最近では樹木や草花の癒しの効果も注目されるようになり、「5本の樹」計画の一つの成果として現れ始めています。

豊かに整備された緑化は、時間の経過と共に成長して住環境への愛着をはぐくみ、住まいやまちの資産価値を高め、「経年美化」を実現する重要な要素となっています。



「5本の樹」計画

生物多様性活動に関する民間団体への参画

「企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB※)」への参画

生物多様性条約(CBD)では、生物多様性の保全と持続可能な利用の実現等、条約目的の実現について、民間部門の重要性が強調されています。「JBIB」は、2008年4月1日に、当社のほか、国内で生物多様性の保全および持続可能な利用に積極的に取り組む企業が集い、設立され、2012年6月には一般社団法人となりました。当社は創設メンバーとしてその創設に関与し、早くから生物多様性に関する取り組みの重要性を認識して来ました。参加企業は2013年9月25日時点で正会員企業38社、ネットワーク会員企業16社にのぼり、企業が主体となって連携した活動が行われています。

生物多様性の保全に関する共同研究を実施し、その成果をもとに他の企業やステークホルダーとの対話を図ることで、真に生物多様性の保全に貢献するWG活動を展開しています。

2014年2月には、JBIBの会長をつとめる三井住友海上火災保険株式会社(社長:柄澤 康喜)主催の生物多様性に関するシンポジウム「企業が語るいきものがたりPart7」を開催され、JBIBが特別協力を行いました。

本シンポジウムは2007年から毎年開催しており、今年で7回目となります。今回は、10月に韓国のピョンチャンで開催されるCOP12(生物多様性条約第12回締約国会議)の最新情報や愛知目標達成のための「生物多様性国家戦略2012-2020」の進捗状況を踏まえて、持続可能な消費と生産のための生物多様性の必要性と企業が果たす役割について考えていきます。また、企業の関心が高いテーマを取り上げる3つの分科会を用意し、生物多様性に配慮した「土地利用」「水管理」「原材料調達」についても、参加者の皆さまと一緒に考えていきます。このシンポジウムにおいて、当社は「原材料調達」の分科会にパネリストとして参加し事例発表を行いました。

【関連項目】

> [「企業と生物多様性イニシアティブ\(JBIB\)」ホームページ](#) 

※ JBIB(Japan Business Initiative for Biodiversity)

日本経団連等「生物多様性民間参画イニシアティブ」、「生物多様性民間参画パートナーシップ」への参画

生物多様性条約第9回締約国会議(COP9)では、開催国ドイツ政府の主導で「ビジネスと生物多様性イニシアティブ(通称:B&Bイニシアティブ)」が提唱され、当社は日本企業9社のうち1社として、2008年に参画に署名しました。

その後、幅広い業種でさまざまな規模の事業者が生物多様性に関する取り組みに参画し、その裾野を拡大していくことが必要として、2010年5月25日、生物多様性の保全および持続可能な利用等、条約の実施に関する民間の参画を推進するプログラム「生物多様性民間参画イニシアティブ」が、10月にはその活動主体となる「生物多様性民間参画パートナーシップ」が設立されました。

これは、日本経済団体連合会、日本商工会議所および経済同友会等、経済界を中心とした自発的なプログラムとして、国際自然保護連合日本プロジェクトオフィス、農林水産省、経済産業省および環境省と協力されたもので、パートナーシップ参加事業者会員は2014年2月時点で440事業者、21経済団体、NGO・研究者会員28、公会員15に及び、当社もこれに加盟しています。

「5本の樹」計画

緑豊かな賃貸住宅「シャームゾン ガーデنز」

「5本の樹」を生かして エクステリアで賃貸住宅の質を向上

当社は、「5本の樹」計画の考え方を、賃貸住宅のエクステリア提案でも生かしています。特に、「シャームゾン ガーデنز」と名付けている賃貸住宅では、植栽計画は重要な意味を持ちます。



Sha Maison Gardens

当社は、まちや自然、暮らす人の観点から敷地環境を高める「5つの環境プレミアム」(①街並みとの調和 ②自然環境の保存と再生 ③環境負荷への配慮 ④快適性を高める設計 ⑤安心・安全をもたらす設計)を新たな指標とし、それぞれの項目に当社独自の厳しい評価基準を設け、数字で見える化し建物とともに敷地、周辺環境も含め良好な住環境を創造しています。このような優良な環境の物件は、入居者にとっての住環境を向上させるばかりでなく、オーナーにとっても空室率や賃料の下落を抑え資産価値を向上させることになり、将来まで選ばれ続ける賃貸住宅になります。



周辺環境との調和を図り、「まちの財産」にする

「シャームゾン」の計画地では、周辺環境との調和がまちなみの美しさに影響します。敷地全体で建物と調和する緑豊かな共有空間をデザインするとともに、歴史ある既存樹の利用や、経年美化素材の利用も推進するなど、その土地の魅力を最大限に引き出しながら物件の魅力を高めることで、地域に溶け込む「まちの財産」をつくります。



既存樹や井戸などを利用したエクステリア計画。石積みなど経年美化していく素材も使っています。



やむなく伐採することになった既存樹(マツ)を使ったシャームゾン銘板

緑化率を高め、環境価値の向上につなげる

入居者にとっても、緑豊かな環境は心地よく暮らすための大切な要素です。緑化率10%以上を目標に、経年美化を実現する緑の環境づくりに努めます。また、建物は住棟間の距離や窓の配置などに工夫し、樹木も生かして外部からの視線を自然に遮ることができるよう、プライバシーにも配慮します。植栽する樹木はもちろん「5本の樹」を中心とし、生物多様性に配慮した計画を心がけています。



緑の共有スペースで、コミュニティを育てる

入居者同士の自然な交流をはぐむコモンスペースや、近隣の人々とのふれあいを生むようなオープンスペースなどを、それぞれの敷地に合わせて計画。コミュニティづくりに有効な、緑豊かな共有空間を効果的に配置します。



高低差を魅力に変えた
立体感のあるエントランス



コミュニティを育む緑豊かな
「コモンスペース」

「5本の樹」計画

分譲マンションにおける緑化の推進

従来のまちづくりでは、マンションは地の利と利便性が最大のポイントで、植栽などの緑化はむしろ計画コストや管理費に影響を与えるものとして敬遠され、エントランス部などに外来種の常緑樹中心に最低限の植栽が施工されることも少なくありませんでした。

積水ハウスでは、2001年に戸建住宅や大規模分譲地から「5本の樹」計画に基づく緑化を開始しました。緑化がまちの価値を高め、住まい手にとっても快適性を高め魅力をアップする重要な要素であることを全社で共有し、分譲マンション事業においても緑化を推進し、近年は緑被率20%を目標として事業を推進しています。

こうした取り組みの結果、緑被率の高さは積水ハウスの分譲マンション「グランドメゾン」の大きな特徴として評価されています。2013年度の緑被率は平均で約23.8%（総敷地面積6万3333m、総緑地面積1万5057m）となっています。

共同住宅であるからこそ、共有部の豊かな緑は入居者の心を癒し、住民同士のふれあいの場としても、その付加価値を高める重要な意味を持つと考えています。

グランドメゾン 狛江（東京都狛江市）

小田急線「狛江」駅から徒歩6分。約2万mの敷地に「グランドメゾン 狛江」は誕生しました。

外周部を中心に既存樹を保存。メインアプローチには移植した既存樹を中心にゆったりとした車寄せを設け、建物の顔をシンボリックに創出。多摩川の河原をイメージし、雨水を利用する「多摩川ガーデン」。西側と北側にはゆったりとした緑地帯とともに緩やかに弧を描く里山遊歩道。など、「5本の樹」計画の下、在来種中心の植栽を行い、緑あふれる街並みの創造を目指しています。

【敷地面積 1万9026.25m 524戸、2013年7月竣工】





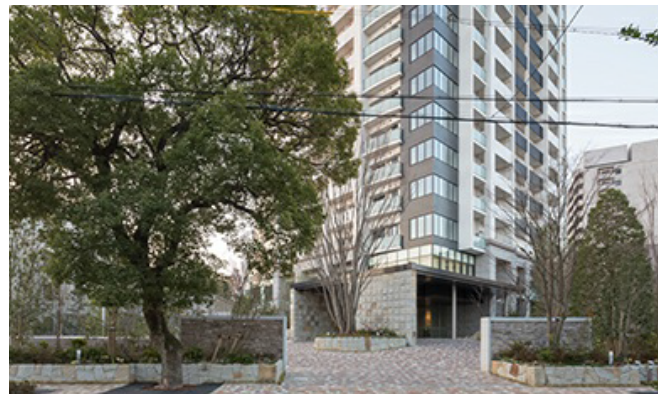
グランドメゾン池下ザ・タワー(名古屋市千種区)

「グランドメゾン池下ザ・タワー」は名古屋駅まで11分の地下鉄「池下」駅に直結する、愛知厚生年金会館の跡地に誕生しました。既存樹のクスノキをはじめ、「5本の樹」計画に基づく在来種を中心にした植栽は約6600本を数えます。また、地産地消の観点から、外構の石積みには地元で産出される恵那石を利用し、「経年美化」のまちづくりに努めています。敷地緑化率27%を確保した庭園は住人に魅力的な住まいを提供するばかりでなく、周辺環境との調和にも寄与します。

【敷地面積 6813.96㎡ 354戸、2013年11月竣工】



タワーズアプローチ



グランドエントランス(左が既存のクスノキ)

「5本の樹」計画

「5本の樹」いきもの調査

2013年度は、2012年に続き、大規模な埋め立て人工島である「福岡アイランドシティ」で調査を実施しました。

「5本の樹」いきもの調査は、専門家との協働で2008年9月から実施しているもので、「5本の樹」計画のまちづくりの前後で、生き物の数を調査し、周辺環境との違いや、経年による変化を記録し、その効果を検証するものです。

「福岡アイランドシティ」の、2005年から複数の街区ごとに順次分譲を開始した当社分譲エリアと中央公園エリアで、2013年の調査でも昆虫8目30科62種(昨年度:昆虫7目20科46種)が、鳥類10目20科24種(昨年度:6目14科19種)が確認されました。一般の既成市街地に生息する種のほとんどが確認されており、埋め立てによる分譲地であっても、適切な植栽樹種の選択と街区デザインにより、周辺地域の生態系が着実に根付いていると評価できました。

昆虫は、エンマコオロギやオンブバッタ、ヤマトシジミなど、いわゆる都市的な環境に適応した種が多かったのですが、バッタ類が17種も生育し、アオモンイトトンボも複数地区で生息するなど、特に草地環境が特徴的な空間になりつつあると考えられます。

鳥類は、キジバトやヒヨドリなどのいわゆる「都市鳥」が多かったのですが、「都市鳥」の中では比較的樹林を好むコゲラを初めて分譲地エリアで確認しました。植栽した樹木が順調に生長していることの証明です。他にも草地を好むセッカや林縁部を好むホオジロなども確認され、「5本の樹」計画による多様な緑化環境が提供されていることがわかります。

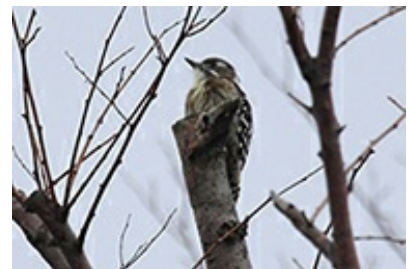
また、アイランドシティ中央公園では、福岡県および環境省の絶滅危惧Ⅱ類であるハヤブサを確認。「福岡アイランドシティ」にヒヨドリ、ドバトなど食物となる鳥類が多いことも示しています。



いきもの調査実施中の様子



分譲地エリアにいた
ハラビロカマキリ



ケヤキの枯枝にとまるアカゲラ

「5本の樹」計画

「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」

当社は、「5本の樹」計画を通じて、住宅の庭先からの生態系保全を呼び掛けています。

多くの方に身近な鳥や蝶にもっと親しんでもらい、自然保護意識、環境意識の向上を図るために、携帯電話から樹木やその樹木に集まる鳥や蝶の情報が入手できる「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを開発し、普及に努めています。

本物の鳥の鳴き声と写真が確認できるため、いわば「携帯版ポケット自然観察図鑑」として活用されています。

2009年7月には「第3回キッズデザイン賞(コミュニケーションデザイン部門)」(主催：NPO法人キッズデザイン協議会)を受賞しました。

毎日平均200人近くの方にご利用頂いており、2013年度は年間約6万5000件の利用がありました。2014年2月にはスマートフォン版がオープンし、より画像が見やすくなり活用しやすくなりました。

お客様との外構打合せ時にも使用する庭木図鑑「庭木セレクトブック」は、2013年に発行15万部を達成し、「5本の樹」計画樹種数を増やし、さらに庭木セレクトブックからモバイル端末を用いて見ることの出来る映像コンテンツを盛り込み、大幅にリニューアルしました。

今後も、お客様が「5本の樹」に興味を持って頂けるコンテンツの充実を図ります。

「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを運営

鳥や蝶、樹木の名前を知らなくても形や大きさ、色の特徴から検索可能。鳥は鳴き声を再生して確認することができます。

- 鳥24種(鳴き声も)
- 蝶24種
- 樹木92種

を掲載

■ サイトトップページからアクセス <http://5honnoki.jp>

■ QRコードからアクセス

「5本の樹」計画

「新・里山」



積水ハウス株式会社の本社所在地である「新梅田シティ」は、「梅田スカイビル」(40階、173m)を中心とした大阪の代表的なランドマークで、隣接地にはグランフロント大阪等も建設され、現在注目のエリアとされています。

「新・里山」は、2006年4月に、ビジネス・商業の集積地「新梅田シティ」の北側部分約8000m²(2400坪)の敷地に、当社「5本の樹」計画に基づき、日本人の原風景である里山を手本とした「新・里山」を整備し、一般に公開しています。

「新・里山」には草花だけでなく、雑木林や竹林、棚田、野菜畑、茶畑などを配しています。自然に負荷の少ない有機栽培管理を行うほか、地域の自生種・在来種を中心に植栽することで、本来その地域に生息する生き物の多様性の保護にも配慮しています。この「新・里山」の豊かな植生により、ここを訪れる人々だけでなく、野鳥や蝶・トンボなどの昆虫をはじめ様々な生き物が関わりを持ちながら共生し、都市環境と自然が融合する場となっています。

また、「新・里山」は、田畑での米や野菜作り、雑木林の下草刈りなどを、オフィスワーカーや地域の住民によるボランティア活動を実施し、地元の子供たちにも本来の自然の姿を学習してもらう場としても利用されています。

小学生には、稲の植え付けから収穫まで、また、幼稚園児には保護者とともに、さつまいもの植え付けから収穫までと1年を通して、自然とふれあいながら、食育を通して命の尊さを知ってもらう環境教育の実施を毎年行っています。

収穫された農作物などを、ビル内にあるオフィスワーカー専用のスポーツクラブで、一口100円から寄付という形で販売し、収益は「新・里山」はじめ、ビル敷地内の緑地環境を管理するための費用として役立てています。

自然観察会や味わう「収穫祭」なども実施し、「新・里山」は都心の中での懐かしい「社会コミュニケーション」の場となっています。

2009年には、環境省主催のストップ温暖化「一村一品大作戦」で、都会のど真ん中の公開空地でのさまざまな環境取り組みが評価され、銅賞を受賞。2013年にはキッズデザイン賞を受賞しました。

このような中、「新・里山」には、生態系ピラミッドの頂点に位置するハイタカが2008年11月に、また絶滅惧種のミゾゴイが2013年10月にそれぞれ飛来しました。



地元の小学生による田植え



水辺で見られた、トンボの羽化

積水ハウスは、庭づくりやまちづくりを進める際、地域の気候風土に適した日本の原種や自生種、在来種の樹木を植えることにより、その地域に生息する多様な生き物を養い、「本来の自然」を取り戻す「5本の樹」計画を提案しています。「5本の樹」計画では、日本の豊かな自然を育ててきた「里山」を手本に、気候や植物の適応性などにより日本を5つの地域に分け、「3本は鳥のために、2本は蝶のために」という思いを込め、それぞれに適した自生種・在来種を選別・採用します。

「5本の樹」計画を推進することで庭と地域の自然を調和させ、地域の生態系を守ることが企業の社会的責任の一つであると考えています。今後も持続可能な社会の実現に貢献するとともに、その社会の中で暮らしの提供をリードし続ける「住環境創造企業」を目指します。



「新・里山」では、高木はコナラやクヌギなど、雑木林を構成する日本の原種や在来種を中心に植栽しています。そのため、雑木林を利用できる野鳥や昆虫が多くなり、生態系が安定します。剪定や除草残渣は、通常の公園のようにゴミとして処分してしまわずに場内で堆肥化する他、無農薬の有機植栽管理など「環境配慮型植栽管理」を実践していきます。

① 里の棚田

都会のど真ん中に約200m（60坪）の棚田があります。棚田は、大変多様な生き物達の命を養う場で、公開前からすでに水生昆虫やカブトエビが集まり始め、夜はカエルの合唱が賑やか。少しでも多くの生きものに役立つように、畦道の土手の石積みはできるだけ隙間を残した自然の石組みにしています。

② 花と蝶の庭

大阪府城山高等学校（2008年の統廃合により廃校）の中村和幸教諭や同校ビオトープ研究会の生徒達が大切に育てた食餌植物や吸蜜植物の寄贈を受けて、蝶などの集まる庭にしています。

③ 菜園ガーデン

野菜作りの一部は、専門家の指導の下で、ボランティア活動の参加を呼びかけています。節分用の大豆や芋など、参加した人たちにとっては、収穫の喜びはもちろん、環境や季節感、「食」について学習するきっかけになることを考えています。

④ 里の水辺

新梅田シティの人工大滝から流れる水の循環のイメージの中で、せせらぎは様々な水生昆虫などの生を育むとともに、子供たちにとってのも自然観察の格好の場となります。

⑤ 野鳥の水広場

雑木林の奥には、野鳥などが安心して水浴びなどに利用できる小さな水場を設けています。

⑥ 里の奥池

止水の小さなため池のピオガーデンとして、水生植物等を育てます。

⑦ 小さな鎮守の森

常緑樹を中心に植栽しており、ビル風に対する防風林の役割も果たしています。

巨大緑化モニュメント「希望の壁」完成

「新梅田シティ」東側に高さ9m・長さ78m・奥行3mの巨大緑化モニュメント「希望の壁」が完成し、2013年10月21日、完成披露式を行いました。

これは、積水ハウスが、建築家安藤忠雄氏の発案を受け、本社のある「新梅田シティ」に建てたもので、壁の両面は、側面も植物で覆ったプランターで構成されており、積水ハウスが進めている「5本の樹」計画での選定樹種であるソヨゴ、クチナシ、ヒラドツツジ、ヤブツバキ、ヤマブキ、フジ、オオイタビなどを中心に約100種類2万本以上の多彩な植物を植栽しています。

この「希望の壁」は、開花時期の異なる草木を計画的に配置することによって、四季に応じて表情が変わる斬新な巨大緑化モニュメントです。「希望の壁」が設置された「新梅田シティ」は、「梅田スカイビル」や2006年に北側に創設された、都心にいながら里山の原風景を望むことができ、絶滅危惧種を含む多くの生き物も集う「新・里山」などがある複合施設で、2014年3月に20周年を迎えました。「希望の壁」は「新・里山」ともつながり、大阪の街に緑あふれる快適で楽しい、癒しの空間となります。

「希望の壁」の草木は、各地の自生種・在来種を庭に植栽することで、庭や郊外の森や里山をつなぐネットワークを形成して生態系保全を目指す、積水ハウスの取り組み「5本の樹」計画の選定樹種などを中心に植栽しています。また、蝶を招く花木も混植しており、蝶の専門家との情報交換なども積極的に行い、「新・里山」東側の「バタフライ・ガーデン」ともつながる「バタフライ・ウォール」を目指すなど、「新・里山」とともに豊かな生態系を育みます。自然には渓谷やがけなど、立体的な環境が主であり、「希望の壁」は都市での生態系保全の取り組みにおいても新たな試みとなります。

